



未来の自分を支える軸を築く

浅野 善英

東北大学大学院医学系研究科神経・感覚器病態学講座皮膚科学分野教授

先日、厚生労働省指定オンライン診療研修を受講した。「オンライン診療の適切な実施に関する指針」について初めて目を通したが、オンライン診療とは別に「遠隔健康医療相談(医師)」という区分があることを知った。「相談者個別の状態に応じて必要な医学的助言を行うこと、あくまで一般論の回答にとどまり患者の個別的状態を踏まえた診断などは行わない」と定義されており、本指針の対象外と位置づけられている。リアルタイム性は要求されず、チャット等でも可能とのこと。この記載を読んで「これって強皮症オンライン相談？」との思いが頭に浮かんだ。

東京大学皮膚科で2009年7月～2022年1月まで強皮症オンライン相談を担当した。強皮症で困っていることがあれば、メールあるいは電話でなんでも相談に応じる無償のサービスである。平均すると週に1～2件、多いときは5件くらい来ることもあった。総回答数は数千にのぼり、このサービスが受診のきっかけとなり数年来主治医を務めた患者さんも数百にのぼる。1人1人に真摯に向き合い積み上げてきた経験が、いつしか未来の自分を支える大きな幹へと育ち、揺るがない軸となった。

2022年2月に東北大学皮膚科に異動したが、初日にホームページ上に「強皮症オンライン相談 in 東北」を開設した。患者さんからサービス継続の要望を多数いただき、医局秘書さんの協力を得て赴任日に合わせて開設した。医局員は「そんなの意味あ

るの?」という表情だったが、開設後24時間と経たずに第1報の相談が届いた。東北でこのシステムがワークするのだろうか?という一抹の不安があったが、疑問の目を向ける医局員に対してなんとか面目を保つことができた。平均すると週に1～2件は相談があり、一定のニーズがあることがわかった。東北大学でも早速多くの強皮症患者さんが私の外来を受診してくれているが、2カ月を過ぎたころ、東京に比べると患者さんの訴えが少なく、待ち時間に対する苦情もないことに気づいた。医局員の話によると、東北人は口数が少なく、多少のことは我慢する性格の人が多いらしい。振り返ってみると、東大病院時代、東北地方から受診される患者さんには確かにそのような傾向があったことにいまさらながら思い至った。

実はその傾向は医局員にもあるように感じている。余計な口出しはせず、謙虚で遠慮しがちな東北人とのことだが、教室運営においても医局員が内に秘めているものに目を向ける努力を怠らないように日々心掛けている。さまざまな困難はあったが、自分の軸を貫くことで得られた貴重な機会。自分自身の未知な横顔に出会えることを楽しみにしながら、新しい仲間と東北地方での強皮症診療の展開を楽しみたい。